

博士論文（要約）

論文題目 初級韓国語学習者の学習態度と学習経験による態度変容に関する実証的研究

氏名 齊藤良子

第 1 章 序論	1
第 2 章 初級韓国語学習者の学習動機の特徴と学習経験による変化	6
2.1. 序	6
2.1.1. はじめに	6
2.1.2. 先行研究	8
2.1.2.1. 外国語学習動機	8
2.1.2.2. The L2 Motivational Self System 理論について	9
2.1.2.3. The L2 Motivational Self System 理論を用いた先行研究	10
2.1.2.4. 韓国語学習に対する動機づけの先行研究	12
2.1.3. 予測される結果	14
2.2. 方法	16
2.2.1. 調査方法と調査実施期間	16
2.2.2. 調査参加者	16
2.2.3. 質問紙	18
2.2.4. 分析方法	28
2.3. 学習動機調査の結果と考察	30
2.3.1. 努力基準 (Criterion Measures)	36
2.3.2. 外国語における理想自己 (Ideal L2 Self)	39
2.3.3. 外国語における社会的にあるべき自己 (Ought-To L2 Self)	41
2.3.4. 親の激励や家族の影響 (Parental Encouragement / Family Influence)	44
2.3.5. 実利性 (Instrumentality-Promotion)	46
2.3.6. 不利益回避性 (Instrumentality-Prevention)	49
2.3.7. 語学学習への自信 (Linguistic Self-confidence)	52
2.3.8. 外国語学習への態度 (Attitudes Toward Learning L2)	56
2.3.9. 目標言語圏への旅行志向 (Travel Orientation)	59
2.3.10. 自国文化が侵害される恐怖 (Fear of Assimilation)	61
2.3.11. 自民族中心主義 (Ethnocentrism)	63
2.3.12. 外国語への関心 (Interest in the Second Language)	65
2.3.13. 外国語使用時の不安 (L2 Anxiety)	68
2.3.14. 統合性 (Integrativeness)	70
2.3.15. 目標言語圏の文化への関心 (Cultural Interest)	73
2.3.16. 目標言語社会への態度 (Attitudes Toward L2 Community)	75
2.3.17. 前後期比較と変化調査で明らかになった変化の傾向	78
2.3.18. The L2 Motivational Self System 理論の 3 つの要素による分析	79
2.4. 成績による学習動機比較	82
2.4.1. 分析方法	82

2.4.2. 成績上位群と下位群の学習動機比較.....	88
2.4.3. 成績上昇群と下降群の学習動機比較.....	106
2.4.4. The L2 Motivational Self System 理論の3つの要素による成績分析.....	116
2.5. まとめ.....	118
 第3章 初級韓国語学習者の学習ビリーフの特徴と学習経験による変化.....	129
3.1. 序.....	129
3.1.1. はじめに.....	129
3.1.2. 先行研究.....	131
3.1.2.1. BALLI について.....	131
3.1.2.2. BALLI を用いた先行研究.....	131
3.1.2.3. 韓国語の学習ビリーフに関する先行研究.....	132
3.1.3. 予測される結果.....	134
3.2. 方法.....	134
3.2.1. 調査方法と調査実施期間.....	134
3.2.2. 調査参加者.....	135
3.2.3. 質問紙.....	135
3.2.4. 分析方法.....	137
3.3. 結果と考察.....	138
3.3.1. 言語学習の適性.....	141
3.3.2. 言語学習の難易度.....	144
3.3.3. 言語学習の性質.....	149
3.3.4. コミュニケーション・ストラテジー.....	151
3.3.5. 言語学習の動機.....	154
3.3.6. 前後期比較と変化調査で明らかになった変化の各領域と項目ごとの傾向.....	158
3.4. 成績による学習ビリーフ比較.....	159
3.4.1. 分析方法.....	160
3.4.2. 成績上位群と下位群の学習ビリーフ比較.....	160
3.4.3. 成績上昇群と下降群の学習ビリーフ比較.....	168
3.4.4. 成績による学習ビリーフ比較のまとめ.....	173
3.5. まとめ.....	174
 第4章 初級韓国語学習者の学習ストラテジーの特徴と学習経験による変化.....	180
4.1. 序.....	180
4.1.1. はじめに.....	180
4.1.2. 先行研究.....	183
4.1.2.1. SILL について.....	183
4.1.2.2. 韓国語学習に用いられる学習ストラテジーに関する先行研究.....	184
4.1.2.3. SILL を用いた韓国語以外の言語学習ストラテジーに関する先行研究.....	185

4.1.3. 予測される結果.....	188
4.2. 方法.....	189
4.2.1. 調査方法と調査実施期間.....	189
4.2.2. 調査参加者.....	189
4.2.3. 質問紙.....	190
4.2.4. 分析方法.....	193
4.3. 学習ストラテジー調査の結果と考察.....	193
4.3.1. 記憶ストラテジー.....	197
4.3.2. 認知ストラテジー.....	199
4.3.3. 補償ストラテジー.....	205
4.3.4. メタ認知ストラテジー.....	207
4.3.5. 情意ストラテジー.....	210
4.3.6. 社会的ストラテジー.....	213
4.3.7. 領域ごとの平均値.....	215
4.3.8. 学習ストラテジー調査のまとめ.....	217
4.4. 成績よる学習ストラテジー比較の結果と考察.....	221
4.4.1. 分析方法.....	221
4.4.2. 成績上位群と下位群の学習ストラテジー比較.....	222
4.4.3. 成績上昇群と下降群の学習ストラテジー比較.....	236
4.4.4. 成績による使用ストラテジー比較のまとめ.....	243
4.5. まとめ.....	244
 第5章 初級韓国語学習者の韓国、韓国人、韓国語イメージと学習経験による変化.....	252
5.1. 序.....	252
5.1.1. はじめに.....	252
5.1.2. 先行研究.....	254
5.2. 方法.....	255
5.2.1. 調査方法と調査実施期間.....	255
5.2.2. 調査参加者.....	256
5.2.3. 質問紙.....	257
5.2.3.1. 前期調査質問紙.....	257
5.2.3.2. 変化調査質問紙.....	262
5.2.4. 分析方法.....	266
5.3. 韓国に対するイメージ.....	267
5.3.1. 因子分析の結果.....	267
5.3.2. 韓国好評価性因子.....	270
5.3.3. 愛国心性因子.....	271
5.3.4. 忠誠性因子.....	272
5.3.5. 先進国性因子.....	273

5.3.6. 活発性因子 .....	274
5.3.7. 韓国に対するイメージのまとめ .....	275
5.4. 韓国人に対するイメージ .....	276
5.4.1. 因子分析の結果 .....	276
5.4.2. 恩情心性因子 .....	280
5.4.3. 主張性因子 .....	281
5.4.4. 堅実性因子 .....	282
5.4.5. 韓国人好評価性因子 .....	283
5.4.6. 韓国人に対するイメージのまとめ .....	285
5.5. 韓国語に対するイメージ .....	286
5.5.1. 因子分析の結果 .....	286
5.5.2. 韓国語好評価性因子 .....	289
5.5.3. 有効性因子 .....	290
5.5.4. 洗練性因子 .....	291
5.5.5. 硬軟性因子 .....	292
5.5.6. 独自性因子 .....	293
5.5.7. 親近性因子 .....	294
5.5.8. 韓国語に対するイメージのまとめ .....	295
5.6. まとめ .....	296
 第 6 章 結論 .....	 300
 参考文献 .....	 311
 謝辞 .....	 316

本博士論文要旨では上記の博士論文の目次に沿って、

第 1 章：序論

第 2 章：初級韓国語学習者の学習動機と学習経験による学習動機の変化

第 3 章：初級韓国語学習者のビリーフと学習経験によるビリーフの変化

第 4 章：初級韓国語学習者の学習ストラテジーの特徴と学習経験による変化

第 5 章：初級韓国語学習者の韓国、韓国人、韓国語イメージと学習経験による変化

第 6 章：結論

の順に要約を述べる。

## 第1章 序論

本研究は、初級韓国語学習者の学習動機、学習ビリーフ、学習ストラテジー、韓国・韓国人・韓国語のイメージの4つの分野について、その特徴と変化を明らかにすることを目的とした。これは、Ushioda (1996, 2001)と Dörnyei and Ottó (1998)の研究によれば、外国語学習における動機づけは安定したものではなく、学習体験や学習段階によって変化する動的なものであるとされていることから、韓国語学習者を理解し、より良い学習環境を提供するためには、学習態度の特徴だけでなく、その変化も明らかにする必要があると考えたためである。

本研究では、質問紙調査法を用いて、前期調査、後期調査、変化調査を実施し、学習態度の特徴とその変化を実証的に明らかにした。調査参加者は調査当時、首都圏にある大学で第二外国語として初級韓国語を学んでいた学習者である。

### 前期調査：

韓国語学習者の初期の特徴を明らかにするために、前期の韓国語の授業で実施した。学習動機、ビリーフ、ストラテジーの各調査においては、韓国語学習の調査と同じ項目で、英語学習に関する調査も実施した。学習動機、ビリーフ、ストラテジーの前期調査および英語学習調査は2010年7月に実施し、調査参加者は103名<sup>1</sup>であった。また、韓国・韓国人・韓国語に対するイメージの前期調査は2008年6月に実施し、調査参加者は39名<sup>2</sup>であった。

学習動機、ビリーフ、ストラテジーの後期調査および変化調査は2011年1月に実施し、参加者は66名<sup>3</sup>であった。また、韓国・韓国人・韓国語に対するイメージの変化調査は2008年12月に実施し、参加者は54名<sup>4</sup>であった。

### 後期調査：

「前期調査」と同じ質問紙を用いて、「前期調査」と同じ年度の後期の授業で実施した。この前期と後期の調査結果を比較した分析を「前後期比較」とした。また、前後期比較の結果は前期と後期の差を客観的にみられる分析であるため実際の変化を明らかにしているといえる。

### 変化調査：

後期調査と同じ項目について、学習者が、自身の学習態度がどのように変化したと考えているかをたずね、学習者が認知している変化を調査した。

なお、本研究の学習動機、ビリーフ、ストラテジーでは、学習者のもつ学習態度の特徴とその変化をより明確にするために、前期調査と、後期調査および変化調査の両方に参加した59名<sup>5</sup>を分析対象の調

---

<sup>1</sup> 性別：男性48名、女性55名、平均年齢：19.5才、学年：1年生～4年生（1年生49名、2年生15名、3年生16名、4年生23名）

<sup>2</sup> 性別：男性14名、女性25名、平均年齢：18.9才、学年：1年生～3年生（1年生21名、2年生14名、3年生4名）

<sup>3</sup> 性別：男性33名、女性33名、平均年齢：19.7才、学年：1年生～4年生（1年生41名、2年生7名、3年生8名、4年生10名）

<sup>4</sup> 性別：男性20名、女性34名、平均年齢：19.5才、学年：1年生～4年生（1年生33名、2年生8名、3年生7名、4年生3名）

<sup>5</sup> 性別：男性31名、女性28名、平均年齢：前期調査および英語学習調査時19.1才、後期調査および変化調査時19.7才、学年：1年

査参加者とした。

また、学習動機、ビリーフ、ストラテジーの各分野の研究では、成績の違いによる分析も行った。成績による分析にあたり、学習者を前期の期末試験と後期の期末試験の結果をもとに、前期、後期を通して成績が上位であった成績上位群（以下「上位群」）14名<sup>6</sup>、前期、後期を通して成績が下位であった成績下位群（以下「下位群」）15名<sup>7</sup>、前期に比べ、後期の成績が上がった成績上昇群（以下「上昇群」）11名<sup>8</sup>、前期に比べ、後期の成績が下がった成績下降群（以下「下降群」）10名<sup>9</sup>の4群に分類した。

成績による分析では、上位群と下位群の学習態度の差を明らかにし、上昇群、下降群においては、それぞれの学習態度が、学習経験によってどのように変化したのかをみた。

## 第2章 初級韓国語学習者の学習動機とその変化の研究

この研究では、Dörnyei (2005)が提唱した The L2 Motivational Self System 理論における「可能自己(possible selves)」の概念に沿った16の動機づけ領域（資料1参照）に基づいて作成された Dörnyei with Taguchi (2010)の外国語学習動機の質問紙をもとに、筆者が韓国語学習者用に修正し、独自に作成した質問紙を用いた。質問項目は71項目である。ここでは、韓国語学習者の動機の特徴とその変化について「可能自己」の側面からまとめる。可能自己の3つの自己の概念は資料2の通りである。

第一に、前期調査の結果は資料3に示したが、この結果、初級韓国語学習者の「理想自己」は、韓国文化が好きで関心をもつ自分、韓国人と親しくする自分、韓国旅行に行く自分、就職活動で成功する自分であり、「社会的にあるべき自己」は、テストで悪い成績をとらない自分や、資格試験で不合格にならない自分、であると考えられる。そして「外国語学習経験」では、韓国語会話に関しては不安を感じているが、韓国語学習に対して一生懸命取り組み、関心や自信もあり、学習環境や経験に関して好意的に思っていることがわかった。なお、前期調査の結果から、学習動機とならないものも明らかになった。具体的な項目は資料4を参照のこと。

---

生～4年生（1年生37名、2年生6名、3年生7名、4年生9名）

<sup>6</sup> 性別：男性1名、女性13名、学年：1年生5名、2年生3名、3年生2名、4年生4名、前期の能力基準点の平均点：60点満点中58.43点（SD=1.40）、後期の能力基準点の平均点：91点満点中86.00点（SD=4.04）

<sup>7</sup> 性別：男性13名、女性2名、学年：1年生10名、2年生1名、3年生3名、4年生1名、前期の能力基準点の平均点：60点満点中33.40点（SD=9.93）、後期の能力基準点の平均点：91点満点中35.07点（SD=13.33）

<sup>8</sup> 性別：男性6名、女性5名、学年：1年生9名、2年生1名、4年生1名（11名中5名は前期の成績が下位群で後期の成績が中位群に上がった者、6名は前期の成績が中位群で、後期の成績が上位群に上がった者）

<sup>9</sup> 性別：男性7名、女性3名、学年：1年生6名、3年生2名、4年生2名（10名中5名は前期の成績が上位群で後期の成績が中位群に下がった者、1名は前期の成績が上位群で後期の成績が下位群に下がった者、4名は前期の成績が中位群で、後期の成績が下位群に下がった者）

## 資料 1

努力基準 (Criterion Measures) 領域 / 外国語における理想自己 (Ideal L2 Self) 領域 / 外国語における社会的にあるべき自己 (Ought-To L2 Self) 領域 / 親の激励や家族の影響 (Parental Encouragement / Family Influence) 領域 / 実利性 (Instrumentality - Promotion) 領域 / 不利益回避性 (Instrumentality - Prevention) 領域 / 語学学習への自信 (Linguistic Self - confidence) 領域 / 外国語学習への態度 (Attitudes Toward Learning L2) 領域 / 目標言語圏への旅行志向 (Travel Orientation) 領域 / 自国文化が侵害される恐怖 (Fear of Assimilation) 領域 / 自民族中心主義 (Ethnocentrism) 領域 / 外国語への関心 (Interest in the Second Language) 領域 / 外国語使用時の不安 (L2 Anxiety) 領域 / 統合性 (Integrativeness) 領域 / 目標言語圏の文化への関心 (Cultural Interest) 領域 / 目標言語社会への態度 (Attitudes Toward L2 Community) 領域

## 資料 2

### 「可能自己」の概念

#### <未来自己ガイドとしての「理想自己」>

外国語に特化した理想的な自己。構成要素は、統合的動機づけと内面化された道具的動機づけなどである。例えば、自分がなりたいと思っている理想の自分の姿が外国語を話す姿であるならば、理想的な外国語における理想自己は外国語を学習するための強力な動機づけとなる。

#### <未来自己ガイドとしての「社会的にあるべき自己」>

外国語に特化した他者からの期待に応えようとする自己。親や友人などの親しい人からの期待や、社会からの期待に合わせる自己であるが、同時に、他者からの非難を避けるための自己イメージでもある。

#### <外国語学習経験>

過去に直接経験した学習環境や学習体験 (教師の影響、カリキュラム、勉強仲間、成功体験など) による動機づけである。

## 資料 3

### 前期調査から明らかになった学習動機の特徴

#### <学習動機>

- ・ 韓国語学習は就職活動で役立つが、英語の方がより役立つと考えている
- ・ 韓国語学習においても英語学習においても、授業で悪い点を取りたくない、資格試験に不合格になりたくないと考えている
- ・ 韓国への旅行願望、旅先での韓国語の必要性が動機となっているが、英語の方がよりその動機づけが高い。しかし、韓国語・英語が出来れば海外旅行が楽しめる、という項目では差がみられない

#### <学習態度>

- ・ 英語よりも、韓国語を一生懸命勉強し、今後も続けたいと思っている
- ・ 英語よりも、将来韓国語を習得できるという自信がある
- ・ 英語よりも、韓国語学習の環境や経験に関して好意的に思っている
- ・ 英語よりも、韓国語への関心が高い
- ・ 韓国語も英語も使用する際に不安を感じている

#### <韓国圏と英語圏の社会や文化に対する態度>

- ・ 韓国語、英語を使用した文化を知るためには韓国語、英語が必要である
- ・ 英語よりも、韓国語の方が好きだ
- ・ 韓国の音楽、映画、ドラマへの関心が高いが、英語圏の文化への関心の方がより高い
- ・ 英語圏の人々よりも、韓国語圏の人々についてもっと知りたい
- ・ 韓国語圏、英語圏の人々と知り合いになりたい



第二に、前後期比較の結果は資料 5 に示したが、後期になり、初級韓国語学習者の「理想自己」が、韓国ドラマ以外の文化にも幅広く親しんでいる自分に变化したことが明らかになった。次に、「社会的にあるべき自己」の、韓国語の試験に失敗しない自分、他者から悪い評価を受けない自分、が前期調査時よりも弱くなったことがわかった。そして「外国語学習経験」では、前期調査時の方が、がんばって韓国語を勉強していたと考えていたことが明らかにされたが、後期調査時の方が、韓国人と話したり、会ったりすることへの不安が若干解消されていることが示唆された。

第三に、変化調査から明らかになった変化の特徴を資料 6 に示したが、ここで明らかになった変化は全てポジティブな方向への変化であった。このことから、学習者は、学習者自身の韓国語学習への取り組みや、韓国、韓国人に対する態度がポジティブな方向に変化していると認知していることがわかった。この結果は、韓国語の学習経験が動機づけをさらに強くすることを示唆していると考えられる。

### <成績による学習動機の比較結果>

#### <上位群と下位群の比較結果>

上位群の方が学習動機づけが強いことがわかった。また、両者の違いが学習経験を経て多様になることも明らかになった。特に、成績の違いと学習に対する努力や文化への関心には強い関連性があることが示唆された。

#### <上昇群と下降群の分析結果>

前期に比べ後期には、上昇群、下降群ともに学習に対する意欲が下がっていることが明らかにされたが、特に、下降群の意欲の下がり方が大きかった。このことから、成績の上昇、下降は学習意欲の維持と関連があることが示唆された。その一方で、下降群は後期になり、新たに韓国の音楽に興味をもつようになったことがわかり、韓国語学習への意欲は低下しても、韓国文化への関心までもなくなる訳ではない、という示唆を得た。

### 資料 4

#### <学習動機とならない項目>

- ・ 外国語を使用する将来の理想の自己を想像する
- ・ 親や親しい友人から否定的な評価を得ないために韓国語学習を行う
- ・ 親や家族の影響
- ・ 韓国語や韓国文化によって、日本語、日本文化が侵略される恐怖
- ・ 自己の文化に最大の価値をおき、どこよりも優れているという考え

## 資料 5

### 前後期比較から明らかになった学習動機の特徴

#### <前期と比べ変化した学習動機>

- ・ 後期の方が、韓国語の授業で悪い成績を取りたくないで韓国語を勉強しなければならないと思わなくなった

#### <前期と比べ変化した学習態度>

- ・ 後期の方が、会話の習得について自信をもつようになった
- ・ 後期の方が、授業内での会話や、韓国語のネイティブスピーカーと会うことへの不安が若干解消された
- ・ 後期の方が、がんばって韓国語を勉強しているという考えが弱くなった

#### <前期と比べ変化した韓国の社会や文化に対する態度>

- ・ 後期の方が、韓国の音楽、ドラマ、テレビ番組、雑誌や本への関心が高くなった

## 資料 6

### 変化調査から明らかになった学習動機の特徴

#### <学習者が認知している学習動機変化>

- ・ 後期の方が、韓国語学習が就職活動に役立つと思うようになった
- ・ 後期の方が、旅行をしたい、海外旅行を楽しみたいという理由から、韓国語学習が大切であると思うようになった

#### <学習者が認知している韓国語学習の態度変化>

- ・ 後期の方が、韓国語が好きだと思うようになった
- ・ 後期の方が、韓国語の読み書きや韓国語自体の習得について自信をもつようになった
- ・ 後期の方が、韓国語を聞くとわくわくする、韓国語会話に興味がある、日本語と韓国語の違いは面白いと思うようになった
- ・ 後期の方が、韓国語の授業の雰囲気が好きだ、韓国語学習は面白い、韓国語を学ぶことは本当に楽しい、と思うようになった
- ・ 後期の方が、韓国語の学習を続けていきたいと考えるようになった

#### <学習者が認知している韓国の社会や文化に対する態度変化>

- ・ 後期の方が、韓国語圏の文化や芸術を知るためには韓国語学習が大切だと思うようになった
- ・ 後期の方が、異文化の価値観や習慣に興味があり、韓国の音楽が好きになった
- ・ 後期の方が、韓国語圏の人々についてもっと知りたい、もっと知り合いになりたいと思うようになった

### 第3章 初級韓国語学習者の学習ビリーフとその変化の研究

この研究では、Horwitz (1987)の開発した Beliefs About Language Learning Inventory (BALLI) をもとに、独自に作成した質問紙を用いた。質問項目は 35 項目で 5 つの学習ビリーフ領域（資料 7 参照）に基づいている。ここでは、前期調査、前後期比較、変化調査の結果の全体的な特徴を述べる。

調査の結果は資料 8 に示したが、この結果から、初級韓国語学習者の学習ビリーフには、学習に対し前向きに取り組み、学習を楽しんでいる側面と、学習に対して困難を感じている側面があること、そして後期の方が前向きさが弱くなっていることが明らかになった。しかし、その一方で、変化調査の結果、学習者自身は前向きでポジティブな変化のみを認知していることが明らかになった。

#### <成績による学習ビリーフの比較結果>

##### <上位群と下位群の比較結果>

統計的有意差がみられた項目は、前期調査 2 項目<sup>10</sup>、後期調査 3 項目<sup>11</sup>と少なかった。このことから、上位群と下位群では、学習ビリーフにあまり差がみられないことがわかった。また、前期と後期で共通して統計的有意差がみられた項目がなかったことから、学習経験によって差があらわれる項目が変化したことが明らかにされた。さらに、ここで明らかになった傾向は学習者全体の傾向とは異なるものであった。そのため、上位群と下位群の間で差がみられた、韓国人への興味や文法と単語の学習の重要性についてのビリーフを維持することと、良い成績を維持することには何かしらの関連があると考えられる。

##### <上昇群と下降群の分析結果>

上昇群、下降群共に、前期に比べ後期になり、韓国語の会話力向上についての前向きさが若干失われたり、上昇群では、前期に比べ後期の方が、韓国語は難しい言葉ではないと思うようになったり、日本人における韓国語会話の重要性に関するビリーフが若干弱くなっているという傾向がみられた。しかし、これらの特徴の多くは、学習者全体と同じ傾向であったため、ここで明らかになった上昇群と下降群の特徴が成績の上昇や下降の要因を反映しているものであるとはいえないと思われる。

---

<sup>10</sup> 「14.韓国語は韓国語圏で学習するのが良い方法である。」「15.韓国語を話すためには、その国の韓国語の文化について知る必要がある。」の 2 項目。

<sup>11</sup> 「11.韓国語学習で大切なのは、単語の学習だ。」「12.韓国語学習で大切なのは、文法の学習だ。」「22.私が韓国語を学習するのは、韓国語圏の人をもっと理解したいからだ。」の 3 項目

## 資料 7

言語学習の適性 / 言語学習の難易度 / 言語学習の性質 / コミュニケーション・ストラテジー / 言語学習の動機

## 資料 8

### <学習ビリーフ（前期調査結果）>

- ・ 英語よりも、韓国語の方が日本人は得意である
- ・ 英語よりも、韓国語の方が誰でも話せるようになる
- ・ 学習者自身には韓国語や英語を学習する特別な能力はない
- ・ 英語よりも、韓国語の方が今以上に上手に話せるようになる
- ・ 韓国語は難しいが、英語の方がより難しい
- ・ 英語よりも、韓国語の方が、話す聞くより、読み書きの方がやさしい
- ・ 韓国語も英語も単語学習、オーディオ機器による学習が大切である
- ・ 韓国語も英語も文法学習が大切であるが、英語の方がより大切である
- ・ 韓国語圏や英語圏で韓国語や英語を学習することは良い方法である
- ・ 韓国語や英語を話すためには韓国や英語圏の文化について知る必要がある
- ・ 韓国語も英語も繰り返し学習することがとても重要である
- ・ 韓国語も英語もネイティブ・スピーカーとの学習は楽しい
- ・ 韓国語圏や英語圏出身の友達が欲しい
- ・ 韓国語も英語も上手に話せるようになりたい
- ・ 韓国語を学べば、良い仕事のチャンスがあるが、英語の方がより一層良い仕事のチャンスがあるだろう

### <前期から変化した学習ビリーフ（前後期比較結果）>

- ・ 後期の方が、韓国語は簡単なことばであると思うようになった
- ・ 後期の方が、話すことは聞くことよりやさしいと思うようになった
- ・ 後期の方が、会話に対する不安感が軽減された
- ・ 後期の方が、今以上に上手に話せるようになるとあまり思わなくなった
- ・ 後期の方が、上手に話せるようになりたいとあまり思わなくなった

### <学習者が認知している学習ビリーフの変化（変化調査結果）>

- ・ 後期の方が、単語学習、文法学習、オーディオ機器を使用した学習、韓国語圏での学習、韓国文化の知識が大切だとより一層考えるようになった
- ・ 後期の方が、繰り返し学習が大切であるとより一層考えるようになった
- ・ 後期の方が、ネイティブ・スピーカーとの学習が楽しいと感じるようになった
- ・ 後期の方が、韓国語圏出身の友達が欲しいと思うようになった
- ・ 後期の方が、韓国語が上手に話せるようになりたいと思うようになった

## 第4章 初級韓国語学習者の学習ストラテジーとその変化

この研究では、Oxford (1990)の開発した Strategy Inventory for Language Learning (SILL) をもとに、独自に作成した質問紙を用いた。質問項目は、50 項目であり、6 つの学習ストラテジー領域（資料 9 参照）に基づいている。ここでは、前期調査と後期調査、前後期比較、変化調査から明らかになった特徴を述べる。

第一に、資料 10 に示した前期調査と後期調査の結果から、初級韓国語学習者は前期、後期ともに、単語学習や会話練習に用いる学習ストラテジーを多く使用することが明らかになった。また、英語との比較により、韓国語学習と英語学習に用いるストラテジーには共通点が多いことがわかった。

第二に、資料 11 に示した前後期比較と変化調査の結果から、前期に比べ後期の方が用いるようになった学習ストラテジーの多くが、新出単語に関するものであることがわかった。特に、後期になり、日本語と韓国語の類似点を単語学習に生かそうとしたり、韓国語を聞いたり、読んだりする学習ストラテジーを積極的に用いていることがわかった。さらに、前後期比較と変化調査の結果から、学習者の実際の変化と認知している変化には共通するものと異なるものがあることが明らかになった。

### <成績による学習ストラテジーの比較結果>

#### <上位群と下位群の比較結果>

上位群の方が下位群よりも、より多くの学習ストラテジーを用いており、成績と学習ストラテジー使用に関連性があることが明らかになった。また、前期、後期を通して、上位群は下位群よりも、授業の復習をよくして、新出単語は何回も声に出したり書いたりすることがわかった。特に、授業の復習をよくすることと、良い成績を維持することの間には関連性がある可能性が高いことが示唆された。ただし、差がみられた項目数をみると、前期では 8 項目<sup>12</sup>であったが、後期になり 3 項目<sup>13</sup>に減少していた。このことから、学習経験によって成績と学習ストラテジーの関連性が弱くなるのではないかと考えられる。

#### <上昇群と下降群の分析結果>

下降群は後期になり、授業の復習をあまりしなくなったという結果がでたが、この傾向は下降群だけにみられる特徴であった。このことから、授業の復習をよくする、という学習ストラテジーは、良い成績を維持するための重要な学習ストラテジーのひとつであると思われる。

<sup>12</sup> 「18. 授業の復習をよくする。」「30. 自分が既に知っていることと、韓国語で新たに学んだ事との関連を考える。」「9. 新出単語は、何回も声に出したり、書いたりする。」「29. 韓国語を使う機会をできるだけ見つけようとする。」「32. 韓国語を話している人がいたら、注意をそらさずに聞くようにする。」「41. 韓国語がうまく使えた時、自分をほめる。」「48. 韓国語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。」「50. 韓国語が使われている国の文化を学ぶようにしている。」の 8 項目。

<sup>13</sup> 「1. 新出単語は、文の中で使って覚える。」「18. 授業の復習をよくする。」「9. 新出単語は、何回も声に出したり、書いたりする。」の 3 項目。

## 資料 9

記憶ストラテジー / 認知ストラテジー / 補償ストラテジー / メタ認知ストラテジー / 情意ストラテジー / 社会的ストラテジー

## 資料 10

### <前期に用いている学習ストラテジー項目のうち単語に関する項目（前期調査結果）>

- ・ 韓国語も英語も、新出単語を覚えるために、単語の音とその単語が持つイメージや絵を結びつける
- ・ 韓国語も英語も、新出単語は、何回も声に出したり、書いたりする
- ・ 韓国語も英語も、知っている単語を様々な状況で使ってみる

### <前期に用いている学習ストラテジー項目のうち会話に関する項目（前期調査結果）>

- ・ 英語よりも、韓国語の発音練習をしている
- ・ 韓国語での会話中、適切な言葉が思い浮かばない時、ジェスチャーを使うが、英会話の方がより使う
- ・ 韓国語も英語も、使っているときに緊張している
- ・ 英語よりも、韓国語の方が、相手の言っていることがわからない時ゆっくり話すか、もう一度言うように頼む
- ・ 韓国語も英語も、自分が話していて間違った時は相手に訂正してくれるように頼む

### <前期に用いている学習ストラテジー項目のうち単語、会話以外に関する項目（前期調査結果）>

- ・ 韓国語でも英語でも、言葉の中に決まった言い回しを見つけようとする
- ・ 韓国語も英語も、自分の間違いに気付き、自分の語学力向上のために有効に使う

### <前期、後期ともに用いている学習ストラテジー項目（前期調査結果と後期調査結果）>

- ・ 新出単語を覚えるため単語の音とその単語が持つイメージや絵を結びつける
- ・ 新出単語を何回も声に出したり書いたりする
- ・ 自分の韓国語の間違いに気付き自分の韓国語力向上のために有効に使う
- ・ 韓国語を使っているときに緊張している
- ・ 相手の言っていることがわからない時ゆっくり話すかもう一度言うように頼む

## 資料 11

### <学習ストラテジー調査で前後期比較と変化調査の結果が一致した変化>

- ・ 後期の方が、新出単語を文の中で使って覚えるようになった
- ・ 後期の方が、韓国語を読む機会をできるだけ探したりするようになった

### <前期よりも後期の方が用いるようになった学習ストラテジー（前後期比較結果）>

- ・ 後期の方が、韓国語の新出単語と似ている日本語の単語を探すようになった

### <学習者が認知している学習ストラテジーの変化（変化調査結果）>

- ・ 後期の方が、韓国語を話している人がいたら注意をそらさずに聞くようになった
- ・ 後期の方が、相手の言っていることがわからない時にゆっくり話すか、もう一度言うように頼むようになった

## 第5章 初級韓国語学習者の韓国、韓国人、韓国語に対するイメージとその変化

この研究では、筆者が独自に作成した質問紙を用いた。この調査結果を、前期調査の結果から明らかになった因子（資料 12 参照）に基づいて、その特徴と変化を分析した。質問項目は韓国イメージと韓国人イメージは 31 項目、韓国語イメージ 30 項目である。

第一に、資料 13 に示したように、韓国語学習者は韓国、韓国人、韓国語に対して、概ね好意的で肯定的なイメージをもっていることがわかった。それぞれのイメージをみると、韓国については、肯定的なイメージに加え、自国を尊重している国であるというイメージをもっていることがわかった。また、韓国人に対して肯定的なイメージをもっているが、親近感を抱かせるようなイメージはもっていないようであることが明らかになった。さらに、韓国語に対しても、親しみと好意に加え、独特で不思議といったイメージももっていることが明らかになった。

第二に、資料 14 に示したように、変化調査の結果を前期調査の結果と比較したところ、イメージが変化した多くの項目は、前期調査で明らかになったイメージがさらに強くなったものである場合が多く、学習者のイメージは学習経験を通じて、強化されることがわかった。その一方で、変化調査でイメージが変わらないことが明らかになった多くの項目は、前期調査で明確なイメージがないことが明らかになった項目であった。ただし、前期調査で明確なイメージがないことが明らかになった項目であっても、韓国イメージの「近代的」「豊かな」、韓国人イメージの「社交的」「親しみやすい」「友好的」、韓国語イメージの「丁寧な」のように、韓国語学習を通じて学習者がイメージを明確化する項目もあることが明らかにされた。また、この結果から、韓国語を学ぶことによって、韓国語だけでなく、韓国、韓国人のイメージも変化することがわかった。

## 資料 12

### 韓国イメージ因子

1. 「韓国好評価因子」(好き、カッコいい、楽しい、よい等)
2. 「愛国心因子」(愛国心、団結力、競争的等)
3. 「忠誠性因子」(信頼できる、秩序を守る、伝統的な等)
4. 「先進国性因子」(近代的、豊か、先進的等)
5. 「活発性因子」(活気がある、せっかち、強い等)

### 韓国人イメージ因子

1. 「恩情心性因子」(親しみやすい、情が厚い、親孝行な等)
2. 「主張性因子」(気が強い、はっきりと言う、積極的な等)
3. 「堅実性因子」(真面目な、正義感が強い、勤勉な等)
4. 「韓国人好評価性因子」(好きな、よい、カッコいい、優しい等)

### 韓国語イメージ因子

1. 「韓国語好評価性因子」(評判のよい、人気のある、よい、好きな等)
2. 「有効性因子」(英語に似ている、世界で通じる、役に立つ等)
3. 「洗練性因子」(おしゃれな、音がきれいな、文字がきれいな、都会的な等)
4. 「硬軟性因子」(弱い、やわらかい、怖くない等)
5. 「独自性因子」(個性的な、独特な、不思議な等)
6. 「親近性因子」(なじみのある、可愛い、日本語に似ている等)

## 資料 13

### <イメージ前期調査の結果> \*各カッコ内の数字は因子番号

#### <韓国イメージ>

「好きで、楽しい、よい国 (1)」「愛国心、団結力が強く、上下関係が厳しい国 (2)」「伝統的で、民主的な国であり、近くて、なじみのある国 (3)」「活気がある国 (5)」

#### <韓国人イメージ>

「親孝行で、情が厚く、礼儀正しく、明るい人 (1)」「上下関係が厳しく、気が強く、感情的で、はっきりと言い、積極的な人 (2)」「真面目で、いい加減ではなく、正義感が強く、勤勉な人 (3)」「よい、近い人 (4)」

#### <韓国語イメージ>

「好きで、よい、親しみやすく、軽快な言葉 (1)」「楽しく、役に立つ言葉であり、英語に似ていない言葉 (2)」「強い言葉 (4)」「個性的で、独特で、不思議で、速い言葉 (5)」「なじみがあり、日本語に似ている言葉 (6)」



＜イメージ変化調査の結果＞ ＊各カッコ内の数字は因子番号

＜韓国イメージ＞

「好きな、楽しい、よい国 (1)」、「愛国心が強い、団結力が強い、上下関係が厳しい、情熱的な国 (2)」、「伝統的な、近い、民主的な、なじみのある国 (3)」、「近代的な、豊かな国 (4)」、「活気がある国 (5)」というイメージに変化した

＜韓国人イメージ＞

「礼儀正しく、明るく、親孝行で、社交的で、親しみやすく、情が厚く、友好的な人 (1)」、「気が強く、感情的で、上下関係が厳しく、はっきりと言い、積極的な人 (2)」、「真面目で、正義感が強く、勤勉な人 (3)」、「よい、近い人 (4)」というイメージが変わった

＜韓国語イメージ＞

「よい、親しみやすい、好きな言葉 (1)」、「楽しくて、役に立つ、英語に似ていない言葉 (2)」、「個性的で、独特で、不思議な、速い言葉 (5)」、「なじみのある、日本語に似ている、丁寧な言葉 (6)」というイメージに変化した

## 第6章 結論

本研究では、学習動機、学習ビリーフ、学習ストラテジー、韓国・韓国人・韓国語に対するイメージに関する4分野の研究によって、従来の研究では明確にされなかった初級韓国語学習者の総合的な学習態度の特徴と変化について明らかにすることができたと思われる。ここでは、本研究で明らかになった結果を、前期調査、前後期比較、変化調査の側面からまとめる。

第一に、前期調査の結果、初級韓国語学習者が韓国語の学習に対して積極的に前向きであり、学習を楽しんでいることや、韓国語の習得に対して自信があること等が明らかになった。また、この結果を英語学習と比較した結果、英語よりも韓国語に対する好意や学習意欲の方が強いことが示唆された。

第二に、前後期比較から、学習経験を重ねることによって、韓国語は易しいと考えるようになり、韓国語で話すことに対する不安が軽減され、前期にはあまり使用されなかった読み書きに用いる学習ストラテジーを使用するようになったり、前期よりも音楽やドラマへの関心が高くなったりと、概ね肯定的に変化していることがわかった。しかし、その一方で、前期に比べ、学習に対する前向きさや楽観的な態度が薄れてきていることも示唆された。

第三に、変化調査の結果、学習者自身はポジティブな変化のみを認知していることがわかった。このことから、学習者自身は、前後期比較で明らかになったやる気や楽観性の減退を感じておらず、前期以上に、積極的に前向きに学習に臨んでおり、ストラテジーも多様化され、韓国、韓国語、韓国人に対するイメージも一層肯定的になったと認知していることが明らかにされた。

以上の研究成果をもとに、韓国語教師が学習者の変化に合わせて授業形態や教材を変えることによって、教室活動をより充実したものにするができることと考える。そして、これらの研究結果は、韓国語の効果的な指導や韓国語以外の外国語教育における動機づけ研究にも役立つことを願っている。

＜今後の課題＞

本研究では、学習態度とその変化について明らかにできたものの、いくつかの研究的限界もあった。

今後は、学習経験におけるどのような事柄が学習態度の変容を引き起こすのか、前後期比較と変化調査の結果が異なる根本的な原因の解明について更に研究を続けていきたいと思う。また、新たな研究課題としては、年度を超えた学習動機の維持について、多様な環境で学ぶ幅広い年齢層の学習者を対象とした調査の実施、本研究結果と他の第二外国語や他教科における学習態度との比較について等も、今後行っていきたいと考えている。

## 参考文献

- Dörnyei, Z. (2005). *The Psychology of the Language Learner : Individual Differences in Second Language Acquisition*. Mahwah, N.J.: L. Erlbaum.
- Dörnyei, Z., & Ottó, I. (1998). Motivation in Action: A Process Model of L2 Motivation *Working Papers in Applied Linguistics (Thames Valley University)*, 4, 43-69.
- Dörnyei, Z., & Taguchi, T. (2010). *Questionnaires in Second Language Research : Construction, Administration, and Processing* (2nd ed.). New York ; London: Routledge.
- Horwitz, E., K. (1987). Surveying Student Beliefs About Language Learning. In W. Anita & R. Joan (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning* (pp. 119-129): Prentice-Hall International.
- Oxford, L., Rebecca. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*: Heinle&Heinle Publishers.
- Ushioda, E. (1996). *Learner Autonomy 5: The Role of Motivation*. Dublin: Authentik.
- Ushioda, E. (2001). Language Learning at University: Exploring the Role of Motivational Thinking. In Z. Dörnyei & R. Schmidt (Eds.), *Motivation and Second Language Acquisition* (pp. 91-124). Honolulu: University of Hawaii Press.